佳作

せみくんありがとう

兵庫県 神戸市立泉台小学校二年　池田 壮佑

ぼくは夏がすきだ。雨ばかりのつゆのきせつがすぎてあさから晴れた空を見るとわくわくする。天気よほうで三十どをこえると聞くとうれしくなる。あつい夏がくると虫とりをしたくてたまらない。草や木がたくさん生えている公園にかぞくで出かけては、目をこらして耳をすませて虫をさがしまわっている。おとうさんやおかあさんに「もうかえろう」と言われてもつぎつぎ虫を見つけてしまうからたのしくてかえりたくなくなってしまう。

今年の夏はクワガタ、キリギリス、バッタ、カミキリ虫、ヤゴ、めだかなどをつかまえた。そのこん虫や魚を今いえでしいくしている。せわをするのはたいへんだけれど、およいだりエサをたべているようすを近くで見られるからたのしい。

でもその虫の中でぼくが一ばんすきで知りたいと思っているのはせみだ。せい虫になってないてしぬまでが早すぎるけれど、そんなみじかい一生をがんばって生きるせみのことがすきになった。

七月二十二日にせみのよう虫をつかまえた。そしていえに十一ぴきもってかえりあみどにつけた。それからかぞくみんなでかんさつをはじめた。あみどでじっとしていたよう虫が、ぼくがおふろから上がって見るとせなかがわれて羽かをはじめていてとてもおどろいた。せなかのつぎに頭を出してそりかえって一生けんめいふっきんをした。なかなかおきあがれなかったけれど、じぶんひとりの力でおきあがれたときにはとてもうれしくなった。こころの中で「がんばれあとすこしだよ」とおうえんしつづけた。

ぼくがつかまえた十一ぴきのうち十ぴきはりっぱなせみになれたけれど、一ぴきは羽がのびずにあさじめんにおちてしまっていた。あとすこしのところでせい虫になれなくてとてもざんねんでかわいそうだと思った。せいこうしたせみもしっぱいしたせみもだれにも教わっていないのにひとりで土から出てきてがんばっていたからすごい。ぼくならひとりで生きていくのはさみしい。大人になってもすぐにしんでしまうのはいやだからぼくはせみになりたくない。だから本とうにせみはすごいと思った。

今ぼくのいえのまわりにはいろいろなしゅるいのせみがないている。テレビでせみのすむちいきがかわってきたと聞いた。らい年も大すきな夏がきたらこの町でせみとりをしたい。すこししか生きられないせみのために、つかまえたらすぐにがしてあげようと思う。ぼくがせみやこん虫のために今できることを考えたけれどわからなかった。これからは虫がすみやすいかんきょうについて知っておとうさんやおかあさんといっしょに考えていきたい。